

GISによる地誌分析—近世隠岐を事例として—

溝口常俊

I. はじめに

本稿は、貞享5年(1688)に記された隠岐の地誌『増補隠州記』の内容を紹介し、近世における地域研究の一助に資するものである。筆者は、近世あるいは明治初期において、全国統一規模での調査はされていないものの、一国規模の広がりやで編纂されている地理書に注目し、村落単位で記載されている基本的な情報を忠実、かつ多角的に読みとり、GISの簡易ソフト「MANDARA」¹を使用して計量化、地図化を心がけてきた。計量化、地図化が最終目標ではなく、こうすることによって、単なる一村落到った研究を超え、村落比較、村落間関係をあきらかにし、その史的展開を重視した地域構造史研究へと進むことを目的としている。

こうした問題意識のもと、筆者は『寛文村々覚書』(1672)、及び『尾張殉行記』(1822)を読み『江戸期なごやアトラス』²を上梓し、目下、その続編として『江戸期尾張アトラス』を作成中であり、同時に明治2年『美濃国村々明細帳』、明治14年『岐阜県各郡町村略誌』のデータベースを構築している。隠岐の地誌『増補隠州記』の分析はこうした一連の作業の一コマである。

II. 『増補隠州記』の記載内容と近世村落

隠岐は島前と島後に分かれており、前者は海士郡と知夫郡の2郡13カ村、後者は越智郡と周吉郡の2郡49カ村からなっている。現在の行政区画では、島前の海士郡は海士町(中ノ島)、知夫郡は知夫村(知夫里島)と西ノ島町(西ノ島)、島後の越智郡は都万村、五箇村、周吉郡は西郷町、布施村にあたる。

本稿で取り上げる貞享期の郷村集成である『増補隠州記』は、全国的に農村経済の転換期に直面して、幕府財政が悪化していたところに作成されたものである。幕府は、天領からの年貢収納量を増加させるために、まず地方行政官の腐敗肅正に乗りだし、貞享4年(1687)6月勘定組頭に全国総代官の会計検査を命じた。こうして編まれたのが『増補隠州記』で、貞享5年6月両島公文が立合って作成し、松江藩派遣の郡代代官の点検を受けている。

この『増補隠州記』の記載項目を、最初に登場する海士郡海士村の場合を例としてつぎに挙げておきたい。公文名、年寄名、本田畑及び新田の面積と石高、小物成(竈役銀、漁請役、牛皮役など)、戸口(百姓・間脇・御役目屋敷;男女、坊主・禪門・比丘尼)、牛馬、弓・鎧・鉄砲、寺

1 後藤真太郎・谷謙二他『MANDARAとEXCELによる市民のためのGIS講座』古今書院、2004

2 溝口常俊監修『江戸期なごやアトラス』名古屋市総務局、1998

社、島、郡境、道積り、雨堤、主要漁獲物・特産物である。

近世隠岐には、4島合わせて59の村落が立地している。この内、島前3島の13カ村すべてと、島後46カ村中33カ村は海に接しており、山がちの内陸村は島後の13カ村にすぎない。島前、島後という地理的位置による区分が全面的にできるくらいがある隠岐において、海と直接接触しない山村の性格をもつ村々が存在しており、山村対海村という区分もできる。

近世村落の土地を基準とした評価として村高があり、その規模でもって村落規模を検討してみよう。隠岐全59カ村の1村平均は203石7斗であるが、最大3カ村、最小3カ村をそれぞれ挙げると、最大1位が浦之郷^{うらのこう}の1186.2石、2位が海士村の1081.4石、3位が知夫里村の863.7石で、これらはいずれも島前の3島それぞれに属する村である。最小1位は岸浜の9.1石、2位は箕浦の11.9石、そして3位は飯美^{いび}の20.3石で島後の海村である。

Ⅲ. 戸数・人口

1 戸数

1村平均の戸数(家数)は55.7戸で、これは戦前の日本の平均的農業集落規模とほぼ同様である。その家がさらに百姓と間脇(水呑)に区分して書かれており、その比率こそ多少の差があるものの、1村(一宮:百姓12戸、間脇0戸)を除いてすべての村に両者が混住していた(図1)。比較的初期の時代に本百姓と水呑という2つの階層の百姓から各村落が構成、運営されていたことは注目しておいてよからう。本州でよくきかれるように18世紀中頃から本百姓が没落して水呑に没落していく経過をとった地域とは異なっている。

基本的には本百姓数が間脇数より多いが、中には少数の本百姓が多数の間脇を抱えている村もある。特にその傾向が強いのが西ノ島の中心地浦之郷村(53戸対149戸)であり、島後の玄関ともいえる矢尾村(31戸対74戸:現在の西郷)である。全村の中で最も都市的集落に顕著であることは、非農業的な百姓が多いことのあらわれであろう。

各村には本百姓、間脇の上に立つ公文とその補佐役にあたる2、3人の年寄がいた。公文は中世荘園時代の荘官の名前が、そのまま徳川時代にまで持越されたものであり、村落内の最上層を占め、屋敷地においても、本百姓が3畝であるのに対し、公文は8畝以上の御免屋敷をもっていた。

2 人口

人数の記載は男性、女性に加えて、坊主、禅門、道心者、神主、比丘女、座頭及び山伏の合計数で書かれている。坊主は全村59カ村中48カ村に登場し1村平均3.0人(最大は海士村の12人)、禅門は30カ村、平均1.0人(最大は美田村の5人)で他はいずれも半数以下の村にしか姿をみせず、したがって1村平均も1人未満である。ただ、これら宗教関係者が1人もいない村はわずか3村にしかすぎない。地域的な分布においては、知夫里島、西ノ島諸村に道心者が集中して存在しているのが目立つ。

男女数を性比(女性100人に対する男性数)で示すと、全村平均では102.1と若干男性が多い島ということになる。この時代、一般的に日本の農村では男性数が1割以上勝るのが普通である

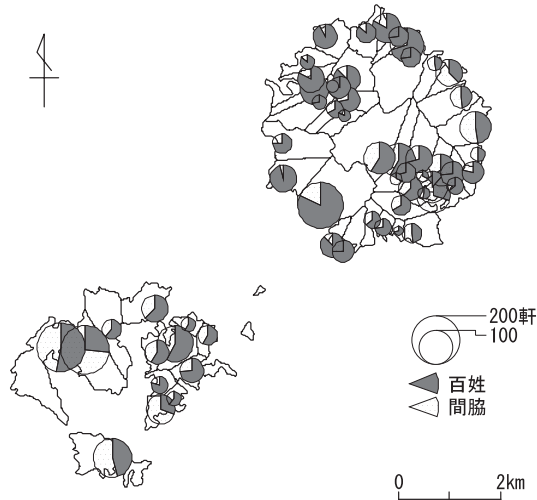


図1 百姓と間脇（1688）

ので、それに比べれば女性が比較的多い地域といえよう。島の中であえて地域的な差異を認めるとすれば、島前に女性が多く（96.1）、島後に男性が多い（103.9）といえるし、漁業・海運に関係の深い村落（船5艘以上所有）39カ村とそうでない村落20カ村とでは、後者の105.8に対して前者は100.3となり、前者で女性の数が相対的に多い。海難で男性が亡くなるというのはよくあることで、それが原因なのか、あるいは海女漁とまではいかないが漁業活動に女性労働が必要なのか、明確な理由はわからないが、漁業・海運業が性比に何らかの影響を与えているのではないかと思う。

IV. 生産基盤

1 農業

田畑には本田と新田があり、全島総計中97%が本田で新田は3%であった。本田の中で田畑面積を比較すると、総面積36,979反中水田は15%に過ぎず、85%が畑地であった。畑地の詳細はあきらかにされていないが、その多くが丘陵地を利用した牧畑であったことは間違いない。牧畑という言葉は、隠岐の場合、いろいろな意味に使われるが、狭義には、施肥農業のおこなわれる普通の畑地（年々畑・麻畑）とは別に、その外側にあつて、ある季節には作物（大豆・小豆・大麦・小麦・粟・稗など）を栽培し、他の耕作と放牧とが輪転する、いわゆる耕牧輪転農法のおこなわれる畑地（このばあい畑は山とも牧ともいわれる）のことで、ひいてはそのような耕作（畑）と放牧（牧）とを交互に輪転する牧畑式ともいべき農業経営方式をも意味する³。時代はさがるが、寛政7年（1795）の郷帳によれば隠岐全島で田高、牧畑高、麻畑高、上畑高が記されており、

3 田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』古今書院、1979

それぞれ 4,453 石, 5,093 石, 118 石, 31 石とある⁴。反当たり石高は水田が畑地より高いので、面積を比較したら水田より畑地の方がかなり多く見込まれ、その中であって圧倒的面積を牧畑が占めていたことになる。

さて、貞享5年(1688)の本田畑を村別にみたのが図2である。島前(海士郡・知夫里郡)の村々の方が島後(越智郡・周吉郡)よりも田畑面積が多く、かつ畑地(牧畑)が広く展開していたことがわかる。前者13カ村の1村平均田・畑が水田は、規模は小さいものの、ある程度の河川が居住地を流れる村落に多くみられた。島前の海士村574反、島後の都万村509反、原田村260反などである。しかし、少ないとはいえ、すべての村落が水田を開いていたことは、稲作志向の強さのあらわれでもあろう。

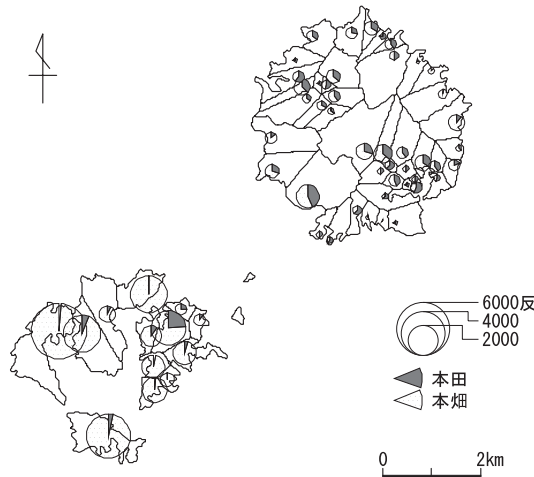


図2 本田畑

2 漁業

隠岐の生業の主役は、牛馬を利用した牧畑とならんで漁業であったことは、その小物成(租税)が詳細を極めていることからわかる。まず、営業税としての漁請役を村別に示すと、もっとも高額税を負担していたのが西之島の浦之郷で銀200匁、続いて島後の南端の小さな岬に立地する津戸村が173匁、その東隣の同じような岬に位置する蛸木村が146匁であった。後2者の農業基盤は極貧で田畑総面積がそれぞれ90反、111反(隠岐全島の平均は645反)を示すに過ぎず、それ故漁業への依存度が高い。

以下、記載順に漁業関係の小物成を村別分布図(省略)として示すと、隠岐の中で海産物の主産地形成がかなり明確になされていることがわかる。鯛と飛魚は浦之郷村、鰯は中之島全村と島後南端諸村、鯛は中之島の崎村と島後の大久村と久見村、串鮑は中之島全村、知夫里村、島後西部諸村というように分かれていた。そんな中で和布は大半の海村で産出されていた。塩は島前の美田村と島後の12の海村で役銀が納められていたが、東北部の4カ村はつぎのような記載があ

4 前掲3) 152頁

ることから生産中止の状態であった。

「飯美村：塩釜壺口 但、釜床ハ四拾五年巳前大破シ、塩焼されとも役塩ハ上ル、布施村、卯敷村、大久村：塩釜壺口、近年不焼、役塩ハ上納致ス」

実際にどのような漁がなされていたかという点、漁業に携わっている村はおおよそ10種類くらいの魚貝類をとっていたようである。魚貝別にいくつの村が漁をしていたかを示すと、烏賊がもつとも多く39カ村、鯖33カ村、飛魚と昆布がともに29カ村、鰯が26カ村、鯛と海苔が25カ村、雑魚が23カ村、荒和布が22カ村、海鼠が19カ村で、以下、鯖網敷と榮螺が9カ村、蛎、鮎、鮎、鰻が2カ村、そして蛤、蛎、鰻が1カ村となっていた。

3 林業

日本の島で、山のない島はない。海に面し、わずかばかりの平野があって其の背後に広範な山地が控えている。それゆえに、島の生業は漁業、農業、林業が共存しているのが普通であった。隠岐も例外ではなく、林業もしくは山に関わる仕事をしていた。一例を示そう。島後の布施村にはつぎのように記載されている。

「一、山林 長壺里拾四町 幅壺里九町 家里ヨリ南ノ奥ニ、杉、榎、萬雑木、南谷、中谷、北谷とて在、(中略)、古来ヨリ良木多シ、今ハ半ハ尽たりといへとも、外の山林よりは茂レリ、松、榎、雑木、薪、材木伐出、商売ニ仕と、寛文九酉ノ七月江戸へ書上ル」

このように、いずれの村も材木は寛文時代以前に半ば、あるいは悉く尽きたとし、貞享時代現在には薪のみ伐り出して商売するか(卯敷村、有木村など)、あるいは薪も稀なり(東郷村、平村など)という村ばかりで、森林資源は枯渇し本格的な林業村は姿を消していた。

4 皮革業・回船業

1) 皮革業

牛馬飼育地であるから皮革製造も早くからあり、『隠州諸式年代記』(島根県立図書館蔵)によると、慶長15年に和泉国堺の田中新兵衛、儀兵衛、仁兵衛が時の領主堀尾山城守に運上納し、西郷町要記で製革にあたったが幾日もなくして廃業した。しかし、運上金は村々に肩代わりされ、小物成りの中に牛皮役として賦課された。貞享5年における村別の牛皮役を示したのが図3である。牧畑の盛んであった島前諸村で多額の牛皮役が課せられていたことがわかる。

2) 回船業

隠岐59カ村中44カ村が船を所有している。総計1,056艘、1村平均18艘である。船の種類が記されており、大船(総計116艘)、手安船(485艘)、鱸戸船(455艘)、及び小海渡船(2艘)である。大船は80石以上、小渡海船は80石以下の回船で前者は主として木材、後者は俵物輸送をしていた。最も多く使用されていた手安船とは小型の多目的船のことで肩幅五尺以上を手安舟、五尺以下をカンコ(黒木)あるいはサンパ(浦郷地区)という。いずれも同型の板張船で、漁業から、農作物、貨物の運搬、人の輸送などに使われた。ことにカンコは昭和四十年代頃まで用いられ、島の代表的な無動力船であった。

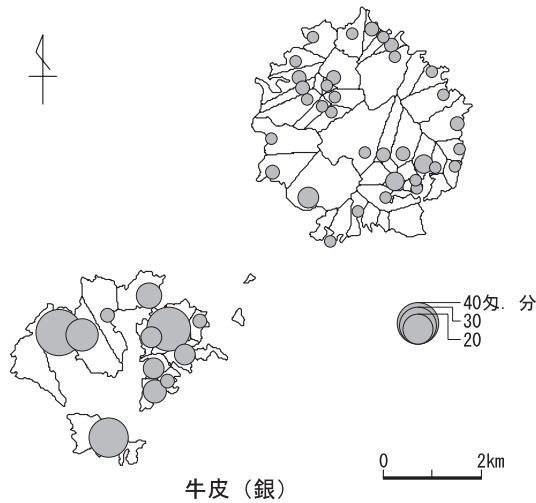


図3 牛皮

V. 『増補隠州記』からみた地域像 —地誌分析の意義—

地誌が従来の地理学研究，あるいは歴史学研究の中で取りあげられることはままあったが，それはあくまでも系統的な主題のもと，例えば人口，土地利用，新田開発研究などにおいて，その概観をおさえるために利用されたにすぎず，地誌そのものを主役として扱われることはなかった。それはひとえに個別事項の記述の薄さ，網羅的記載によるわけであるが，見方をかえれば地誌研究はよみがえるであろう。すなわち，単一項目，系統項目のピックアップ利用型研究ではなく，地誌の特色を活かした総合的分析をめざすのである。

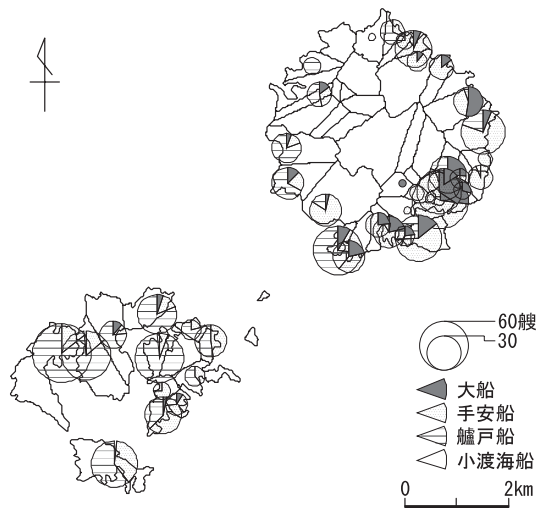


図4 船

本研究で、地誌記載事項を付表で示したようにできる限りデータベース化し、分布図を描いたのはそのためである。こうした図表を比較考察することによって、つぎのような地域像が見えてきた。すなわち、隠岐の村落の生業は、農業、漁業、林業（山利用）の三位一体を基本としていたこと。それは戸口規模のいかんにかかわらずすべての村に水田、畑がもうけられ、新田畑開発がなされていたこと、海に面していない村（山村）を除いてすべての村に漁請役が課せられていた。

漁業は、海に面した海村ではすべてにおいてさかんであったが、多種多様の漁獲が村ごとに特化する形でおこなわれていたことが分布図によってよくわかる。日持ちする形での干物、塩漬け物が特産品として多くみられたことは、当時すでに域外との交易がかなり盛んであったことを物語っている。データベース化はしていないが、地誌項目の中に小島の記載が多く、その記載の中に好漁場が示されていることも多い。

林業においては近世初期には木材伐採が相当なされていたが、中期以降は入り会い林を利用する形で島後北東部諸村が活気をみせたものの、全体的には薪生産に小規模化していった。海村においても多くの村で山の記載があり利用されていた。例えば美田村「此焼火山ノ東西南北の尾谷を隔テ、皆山林也、美田ノ境内ニシテ所々ヨリ入テ、薪を取ル、入口別レテ有り」。

こうした第一次産業を主とする社会において、それとの関連で皮革業、回船業が成り立っていたことも注目しておきたい。

隠岐の個々の村は生業のあり方に共通性を持っていたと同時に、その中身、特に漁業においてするどい個性をもっていた。それが隠岐全体という社会に置いて統合され、その主要部分が商業、交易という形で対外的にアピールできるように調和していたといえよう。

こうした生業に個々の百姓はいかにとり組んできたのであろうか。この点に関して地誌は、つぎのように語る。都万村「一、田畑を耕シ、薪を伐、鱒、烏賊、和布、海苔、鯖、鮑等を取、漁の際に塩焼て家業とス」。生業における村単位での農・漁・林の三位一体が、実は家単位で実施されていたのである。時代は下がるが民俗学の調査がそれを示してくれる。直江廣治は昭和初期久見村の調査で「長い間そして現在においてもなお、生産の基礎は農業で、農の合間に海仕事と山仕事を営んでいる」といい、農、漁、山を総合した生産歴の表を掲げている⁵。横田健一・有坂隆道は昭和31年に釜村の旧庄屋の佐々木章氏から「村人はどの家でも皆漁に行く。昔はほとんど全部が行き、佐々木氏でさえイカ釣りに行った」と聞取る。釜村は海岸段丘上にあり、決して漁場に恵まれている訳ではない。農・山の村である。そんな村でさえ村人はこぞって漁にいったのである⁶。

5 直江廣治「島根県隠地郡五箇村久見」、柳田国男指導日本民俗学会編『離島生活の研究』国書刊行会、1966、299-358頁

6 横田健一・有坂隆道「古文書と伝承を通じて見たる隠岐島の中近世史」、関西大学・島根大学『共同隠岐調査会編『隠岐－隠岐文化総合調査報告－』毎日新聞、1968、199-233頁

VI. おわりに

家族単位でバラエティにとんだ生業を行なおうという姿勢、いわばミニ村落的行為、これが非常に強く見える。家族というミニ村落を多数抱えた自己完結指向の強い村落、そして個々の村落で達成され得なかった部分を、主産地形成というもう一つスケールの大きい領国内で補完させる装置を有していた。そのうえで対外交易を発展させてきたのが隠岐である。いや、こうした姿は隠岐だけではなく日本の前近代の村落構造の特色ではなかろうか。

家・村・隠岐島全体とスケールを変えても農・漁・林の三位一体構造があることを指摘しえたのは、資料とした近世地誌の数値情報をすべてデータベース化し、GISを利用して無数に分布図を作ったことによる。一見無用と思われる地図まで簡単にできてしまうところがGIS初心者にとって最大のメリットといえよう。関係なさそうな地図と地図をならべてみてそこに予期せぬつながりが見いだせることが少なからずあるからである。

注記：本稿は、拙稿「隠岐における田・畑作と地域像」（『近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会、2002、327-352）を加筆修正したものである。本稿で割愛した海産物などの図23葉はこちらの拙稿に収録されている。

（みぞぐち つねとし：名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻）